

事業名称	津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト			
実行委員会	津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト実行委員会			
中核館	岩手県立博物館			
	住所	〒020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷		
	TEL	019-661-2831	FAX	019-665-1214
	ホームページ	http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/		
構成団体	岩手県立博物館、陸前高田市立博物館、東京国立博物館、NPO-JCP、芦屋町立歴史民俗資料館、女子美術大学、公益財団法人日本博物館、			
事業開始時点の課題分析	<p>東日本大震災発災から被災地において続けられてきた被災文化財再生活動を通し、20万点余りの被災資料再生が図られてきたが、被災地では未だ約25万点余りの資料が救出されたままの状態で保管されていて、それらの中には新たな安定化処理技術の開発を待つものが数多く含まれている。これらの資料再生を図るためには、被災地における被災文化財再生の取り組みに対する理解を図りつつ、専門機関連携による早急な保存修復技術の確立を図ることが一層求められている。国際的にも未経験な海水損文化財の再生保存プロセスについて、本事業の中核館をはじめとする関係機関におけるこれまでの取組の状況と課題を広く紹介し、緊急時に必要とする保存修復技術の定着普及を図ること、今後予想される大規模自然災害への保存修復技術からみた減災システム構築に資すること、及び一連の活動成果を被災機関に還元し、博物館復興に寄与することも重要な課題である。これまで発行した安定化処理技術のガイドブックや動画の需要は多く、特別展及びワークショップに対する全国的関心も非常に高い。防災・減災への対処から平成31年度以降も上記事業を開催したい旨の要請も複数の機関から出されている。</p>			
事業目的	<p>本事業は、東日本大震災により博物館施設が壊滅し甚大な被害をもたらされた岩手県陸前高田市立博物館における被災文化財救出と再生への軌跡を辿りつつ、1)安定化処理を円滑に実施するための組織連携の在り方を提示する、2)海水損文化財再生に必要な保存修復技術の確立を図る、3)これまでの活動経験を全国の博物館関係者と共有化し、解決すべき課題を鮮明にして、今後の被災文化財再生の進展に資する、3)今後発生が予想される類似大規模自然災害発生時における被災文化財救援活動に対する基礎資料を提供する、4)被災した博物館復興を支援することを目的として活動を展開する。活動過程で得られた様々な成果は動画、ワークショップ、講演会・シンポジウム、特別展、報告書等の各種手法を講じ、これまでの取組の状況を専門家はもとより広く一般国民に周知する。情報発信に当たっては必要に応じ英文を併記し、国内のみならず、海外の博物館関係者、文化財関係者にも取り組みの状況や活動の成果についての情報提供が効果的に行われるように配慮する。</p>			
事業概要	<p>本事業は、東日本大震災の津波で被災した文化財をはじめとする博物館関係資料を再生するため、試行錯誤を繰り返して構築した安定化処理技術の概要、被災地における取り組み状況、今後の課題について情報共有を図り、将来の類似災害に備えることを目的として、講演会・ワークショップ、特別展を全国3つの機関で実施した。被災地における被災文化財再生の一層の進展と再生資料の活用を促すため被災地で、支援講演会・シンポジウム及び支援企画展を開催した。被災資料救出から再生にいたるまでの歩み、本プロジェクトの活動の軌跡、およびこれまでに確立した安定化処理技術を平易に解説した報告書を刊行</p>			

	<p>し、併せて、最近構築した安定化処理技術の概要を要約した DVD を日英 2ヶ国語で作成した (H29 年度作成した DVD をホームページで公開)。今後の大規模自然災害に備えるため、平成の時代に発生した自然災害で被災した文化財の被災状況と救出状況及びその再生状況について情報交換を行い、今後の大規模自然災害に備えるための課題を整理する研究会を開催した。未だ救出されたままの状態である被災資料再生を円滑に進めるため、安定化処理技術開発の現状と今後の課題について実行委員会構成機関関係者で現状報告及び意見交換を行い、プロジェクトが取り組むべき課題を整理した。</p>
<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>(1) 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携 <input type="checkbox"/>イ ユニークメニューの促進 <input type="checkbox"/>ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館 <input type="checkbox"/>エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信 <p>(2) あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成 <input type="checkbox"/>イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発 <input type="checkbox"/>ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施 <input type="checkbox"/>エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業 <p>(3) 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動 <input checked="" type="checkbox"/>イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>平成 30 年度事業実施後の成果及び効果は以下のとおりである。</p> <p>(1) 新たに構築された安定化処理技術の共有と被災資料再生支援：東日本大震災で被災し、岩手県太平洋沿岸部から救出された資料の再生に従事している機関の取り組みの現状と課題について情報共有を図り、救出されたままの状態である 23 万点余りの被災資料再生を加速するための連携大体制を強化することができた。最大の課題となっている、水洗困難資料に対する対処法、魚介類に起因するたんぱく質や脂質の除去方法の早期確立を目指した取り組みの体制を整備することができた。</p> <p>(2) 新たに構築された安定化処理技術の普及：ワークショップ（図 1）、展覧会を通じ、被災資料再生に対する理解の醸成を図りつつ、新たな支援の輪を広げると共に、被災資料再生の重要性についての理解を深めることができた。各種事業参加者からは「津波で被災した資料の再生は複雑で難しい」、「8 年間の努力に敬意を表する」、「技術を習得し、ボランティアとして被災資料再生を支援したい」といった感想が出され、今後の活動を継続するうえで大きな励みとなった。</p> <div data-bbox="1086 1615 1409 1854" data-label="Image"> </div> <p>図 1 安定化処理技術普及のためのワークショップ(女子美術大学)</p> <p>(3) 大規模自然災害発生に対する備え：各種事業を通じ、大規模自然災害に備えるためには、今後、被災資料の救出と一次保管を迅速に行うための地域連携体制の一層の整備、</p>

救出された資料の再生を図るための専門機関の連携・整備の必要性を博物館関係者に浸透することができた。一連の活動を通じ、現在構築している安定化処理は、台風や洪水、地震に伴う建物損壊等によって生じる被害にも有効で、最近多発する災害に備える意味でも、一層の技術普及が必要であることを示すことができた（図2）。

各種事業参加者からは、「津波で被災した博物館関係施設・被災した資料の状況がよく分かった」、「再生には高度な技術と多大な労力が必要であることがよく理解できた」、「東日本大震災以降、水害や地震被害の発生する現状をふまえ、大規模自然災害発生時の救援準備を進める必要がある」という感想や、「津波被害の恐ろしさを地元の子供たちにも是非伝えたい」といった感想が出された。同時に、救出された資料を再生するうえで必要な文化財科学の専門家は全国的にみてもきわめて少なく、この点が深刻な課題であることも指摘された。この点については、新たに取り組むべき課題である。



図2 津波被災資料の再生に関する展示の展览会（芦屋町歴史の里）

また、「東北から離れた九州では東日本大震災の記憶が薄れているが、特別展の開催によって、災害に対する風化防止が図られた」といった新聞報道や、「被災した漁労用具の再生に福岡県で製作されたシュロ縄が使用された」という新聞報道がなされ、大規模自然災害に対する備えの重要性と共に、被災した博物館資料再生に対する全国的支援の重要性を一般にも周知することができた。

- (4) 被災地博物館での被災資料再生支援及び博物館復興支援：被災地の博物館に新たに構築された安定化処理技術及び安定化処理を円滑に進めるうえでの道具類とその使用方法、安定化処理が終了した資料の経過観察方法を伝達することにより、これまで技術的対応が難しいとして見送られてきた資料に対する措置が施されるようになった。支援特別展・シンポジウム開催に当たっては、喪失した学術情報復元を図るため、再生に用いられた安定化処理技術に加え、有識者からの情報収集、これまでに発行された図録・調査研究報告書等の調査を通して得られた学術情報についても可能な限り紹介し、その成果を被災地に還元した（図3）。

被災地の来場者からは、「再生された資料が携えてきた過去から未来へのメッセージをよく理解できた」、「多くの地域とかかわりを持ちながら被災地が発展してきた様子がよくわかった」といった感想が出された。今後もこの取り組みを続け、喪失した学術情報再生を図りつつ、被災した博物館の復興支援を続ける予定である。



図3 支援特別展（陸前高田市コミュニティホール）

【事業実績】

平成30年度の事業実績は以下のとおりである。

1. 構築された安定化処理技術の普及・定着のための関連行事の開催

(1) 安定化処理技術の普及定着のための関連事業の開催

ア ワークショップの実施

ワークショップは3会場で4回実施した。

①女子美術大学

（平成30年11月4日実施。内容：被災資料の救出、安定化処理、国登録漁撈用具の整理に関する講義、紙を素材とする資料及び染織資料の安定化処理方法に

関する実習、質疑・応答、意見交換。参加者数 26 名 図 4。)

②京都外国語大学 (平成 30 年 12 月 8 日実施。内容：資料の救出・安定化処理に関する講義、紙を素材とする資料の安定化処理に関する実習、質疑・応答、意見交換、参加者数 35 名)

(平成 30 年 12 月 22 日実施。内容：東北地方太平洋沖地震及び津波によって被災した文化遺産の救援と保全、津波で被災した資料に対する安定化処理の現状と課題、被災博物館再興の現状と課題に関する講義、民具の安定化処理に関する実習。質疑・応答、意見交換、参加者数 33 名)

③芦屋町中央公民館 (平成 31 年 3 月 17 日実施。内容：被災した自然史標本の再生と活用、漁撈用具の保護～地域で守り、伝える文化財、津波被災資料再生の歩み-安定化処理方法の構築と実践、大津波プロジェクト展を開催した九州芦屋からの視点、被災博物館再興の現状と課題に関する講義、救出された紙を素材とする資料に対する安定化処理、救出された民具資料に対する安定化処理方法に関する実習。参加者数 19 名)

ワークショップ参加者からの意見・感想

- ・とても貴重な体験だった。
- ・安定化処理の難しさを知った。
- ・時間が少なくあっという間に終了した。
- ・もう少し時間をかけて詳しく解説してもらいたい。
- ・必要な資材等の調達先を教えてください。
- ・水洗可能な資料に対する対処法を教えてください。
- ・水洗可能な資料と水洗不可能な資料の識別方法を教えてください。
- ・紙と染織資料では同じ内容でもアプローチが違うことが良く分かった。



図 4 ワークショップの様子

(女子美術大学)

今後開催に当たっての希望・留意点

- ・今後は海外での被災資料をレスキューするうえでの留意点や、指導者養成のためのワークショップの開催を希望する。
- ・音声案内やビデオなどによる詳細な説明があれば、より望ましいと思う。

イ 安定化処理技術普及のための取組に関する活動報告書の刊行

東日本大震災における岩手県太平洋沿岸部に立地する博物館の被災状況、被災資料の救出状況、救出した資料の再生、とりわけ紙を素材とする資料、民具資料(漁撈用具)、染織資料、アクリル画、自然史標本に対し構築された資料の安定化処理、平成 26 年 5 月から平成 30 年 3 月までの大津波プロジェクトの活動状況についてまとめた報告書を発行。A4 版、オールカラー、3000 部。

ウ 安定化処理技術の普及をテーマとする展覧会の開催

展覧会は以下の 2 か所で実施した。

- ① 女子美術大学 「甦る。ふるさとの宝物 津波で被災した資料再生の軌跡」
(会期：平成 30 年 11 月 1 日～12 月 6 日。会期中の来場者 約 1,000 名)
- ② 芦屋歴史の里 「8 年目の 3.11 ー大津波から甦る財(たから)たちー」
(会期：平成 31 年 2 月 5 日～3 月 21 日。会期中の来場者 728 名)(図 5)

展覧会参加者からの意見・感想

- ・多くの方々の想いと努力、感動しました。そして、皆様のおかげで貴重な日本の財を今日ここで拝見することができ、本当にありがとうございました。
- ・文化財という地域の宝の復活にどれほどの時間と労力がかかるのか、それでも一歩ずつ進んでいる人達がいることを心に刻みます。あきらめずにここまで。本当に頭が下がる思いです。
- ・博物館や図書館など貴重な資料が津波で破壊されているのを見て。胸がつぶれる思いです。よくぞここまで復旧されたというの也有りますが、数多くの資料が失われたことでしょう。残念です。自然の前の人間の非力を感じると共に、復興に向けてがんばっておられる人々にエールを送ります。



図5 展覧会の様子

(芦屋歴史の里)

今後開催に当たっての希望・留意点

- ・紙資料の中性洗剤を使った安定化処理の体験もできればよかった。
- ・ビデオを映してほしい。
- ・写真展などを多く開催してほしい。

エ 全国博物館大会での安定化処理技術の展示普及

日本博物館協会創立90年を記念して開催されたミュージアムメッセ in 東博（東京国立博物館、平成30年11月28日～29日）（図6）において、東日本大震災における岩手県太平洋沿岸部の博物館関連施設の被災状況、被災資料の救出と再生活動、とりわけ構築された安定化処理方法の概要、救出・再生・再生された資料の活用を円滑に進めるために構築された絆の形成、大津波プロジェクトの活用状況についてパネル解説し、併せて、被災前及び安定化処理後の書籍類、古文書、昆虫標本の実物展示を行った。



図6 全国博物館大会での安定化処理技術の展示の様子

(2) 国際発信のための関連事業の実施

ア 被災資料の救出と再生状況についてまとめた日英2ヶ国語のリーフレット発行

東日本大震災における岩手県太平洋沿岸部の博物館関連施設の被災状況、被災資料の救出と再生活動、とりわけ構築された安定化処理方法の概要、救出・再生・再生された資料の活用を円滑に進めるために構築された絆の形成、大津波プロジェクトの活用状況をまとめた日英2ヶ国語のリーフレット（A4版8ページ、5000部）を発行し、ミュージアムメッセ来場者、ワークショップ参加者、特別展・支援特別展来場者、全国の博物館関係機関に配布した。

イ 構築された安定化処理技術をまとめたDVD製作

改定された古文書の安定化処理方法（中性洗剤による洗浄工程を加味したもの）、民具（登録漁撈用具）の安定化処理、安定化処理の概要版についてまとめた動画（日英2ヶ国語）を製作した。また、平成29年度に作成したアクリル画及び染織資料の安定化処理技術について以下のホームページに掲載した。

動画：<https://www.j-muse.or.jp/>、報告分：<http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/>

(動画と報告文の分離はサーバーの関係による。)

2. 被災資料再生の技術支援と再生状況を報告する関連事業の開催

(1) 被災文化財再生の現状と課題を確認し、支援するための関連行事開催

ア 被災地ワークショップ開催

陸前高田市仮設陸前高田市立博物館 (平成30年8月20日、21日。民俗文化財指定の意義と可能性、鳥羽コレクションの価値について、水溶性描画材料で洋紙に描かれた作品の安定性、陸前高田市立博物館の再建に関する講義、カンパス画の安定化処理に関する実習。質疑応答、意見交換。参加者数22名)

ワークショップ参加者からの意見・感想

- ・日ごろ、処理・修復を行う中で発生する疑問点や課題を解決する貴重な機会となった。今後も、定期的にこのようなワークショップを開催していただき、現地での安定化処理及び修復の現状や課題について、専門家との共有を図りたい。
- ・劣化が進んだ紙を素材とする資料の措置方法について研修の機会を設けてほしい。
- ・他機関での実施状況を見学する機会を設定してほしい。

今後開催に当たっての希望・留意点

- ・現在、陸前高田市立博物館では紙製資料・民俗資料等安定化処理及び修復を実施していることから、当該分野の専門家を招いて、処理方法の課題解決につながるワークショップの開催を希望する。

イ 被災企画展の開催 (発災から8年目をむかえて)

陸前高田市コミュニティセンター 「ずっとずっとふるさと陸前高田 ―“奇跡の海”の漁撈用具―」
(平成31年2月6日～11日。入場者434名。)

支援企画展参加者からの意見・感想

- ・ふるさとの文化財を守っていくことの大切さを感じた。
- ・陸前高田市に国登録有形民俗文化財があることを知らずにいたので、当市にまつわる貴重な文化財の存在を知る貴重な機会となった。今まで連続と続けられてきた安定化処理及び修復について、その現状と課題についても知ることができ、非常に有意義な展覧会であった。
- ・全国の多くの方々の支援をいただき、陸前高田市の資料が再生されている様子をよく理解できた。
- ・保管している様子を新しい博物館で見たい。

開催に当たっての希望・留意点

- ・今後も被災文化財の再生を頑張ってほしい。
- ・陸前高田の漁猟用具以外の文化財が、どのような被災状況で、現在までにどのように安定化処理・修復がされてきたのかを知ることのできる展覧会を開催していただきたい。また、専門的な内容ばかりではなく、“被災資料の安定化処理・修復”はどのようなものかを、より分かりやすく解説された展覧会も開催していただきたい。

ウ 支援講演会・シンポジウムの開催

陸前高田市コミュニティセンター 「よみがえる文化財と博物館の復興」

(平成 31 年 2 月 9 日。入場者 105 名。)

支援シンポジウム参加者からの意見・感想

- ・これまでに行われてきた被災文化財再生の道のりを知ることができた。これまで処理・修復が完了した資料について、また現在直面している技術的な課題について、専門的な角度から学ぶことができた。また、“奇跡の海”を背景に発展してきた漁猟用具について、その重要性と背景にある自然環境について、他では聞くことのできない貴重な講演を拝聴することができ、大変有意義なシンポジウムであった。

開催に当たりの希望・留意点

- ・安定化処理及び修復についての現状と課題、専門的な内容の講演も必要であるが、今後は修復された文化財一点一点に焦点を当て、それらの再生過程をより詳しく知ることのできるシンポジウムも開催してほしい。

3. 新たな大規模自然災害に備えた環境整備

(1) 連絡・連携体制の構築・安定化処理技術の開発に向けた環境整備

ア 安定化処理の取り組むべき課題整理のための技術検討会開催

陸前高田市コミュニティセンター

(平成 31 年 2 月 8 日。参加者 12 名。)(図 7)

被災文化財再生の現状と資料を再生させるうえで、今後、どのような取り組みが必要か、取り組むべき課題を整理し、効率的に安定化処理・修復を進めるための情報共有を主な目的とした。



図 7 技術検討委員会で行われた臭気調査の様子

イ 文化財等防災・減災研究会の開催

北海道博物館

(平成 31 年 3 月 7 日～8 日。参加者 30 名。)(図 8)

平成の大規模災害を振り返りつつ、北海道胆振東部地震による博物館や文化財の被害状況、発災以降の博物館連携のあり方などを現地から報告いただき、今後の博物館防災のあり方や展望について議論した。



4. 事業推進環境整備

(1) 事業広報用共通ポスター・リーフレットの製作

ポスター：2,000 部、リーフレット：30,000 枚

(2) 実行委員会、事業推進会議等の開催